

太斎金塚遺跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（太斎地区）に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

2012

新発田市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、新潟県新発田市太斎字金塚401番地ほかに所在する太斎金塚（ださいかなづか）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営ほ場整備事業（太斎地区）に伴うものである。新潟県新発田地域振興局の委託を受け、新発田市教育委員会が主体となって、平成22年6月7日から8月12日に現地調査を、発掘調査終了後から平成24年3月まで整理作業を実施し報告書を作成した。
3. 現地の発掘調査から報告書刊行に至るまでの経費は、総額の90%（整理・報告書刊行の経費は92.5%）を新潟県新発田地域振興局が、直接農家の負担分である総額の10%（同7.5%）は文化財保護部局が負担した。文化財保護部局負担分については、その半額を国庫補助、残りを県と市がそれぞれ負担した。
4. 報告書作成作業は、津田憲司を中心に実施し、これを整理作業員が補助した。
5. 本書掲載の写真は、遺構を津田が、遺物を田中耕作（生涯学習課文化行政室長）が撮影した。
6. 本書の執筆および編集は津田が行った。
7. 調査の記録および出土遺物は、新発田市教育委員会が保管している。遺物の注記は、遺跡名を「太金」と略記し、以下「遺物番号・出土グリッド・遺構・層位・日付」を記した。
8. 発掘調査から本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から多くのご協力・ご支援を賜った。記して感謝の意を表する。（五十音順 敬称略）

小林 弘 高橋春栄 新潟県新発田地域振興局農村整備部 豊浦郷土地改良区

凡　　例

1. 本書に掲載の地形図は、国土地理院発行の1/50,000「新発田」（平成15年）、1/25,000「新発田」（平成22年）、1/25,000「天王」（平成14年）、豊浦郷土地改良区作成の1/1,000「太斎地区地形図」（平成15年）を縮小したものである。
2. 平面図の方位は、第1～4図は天を真北、それ以外は方位記号の方向を磁北とする。なお、磁北は真北から西偏約7° 50'である。
3. 掃図の縮尺は、遺構1/30～1/60、遺物1/3を基本とし、適宜スケールと縮尺を示した。
4. 遺構実測図の「K」は攪乱を示す。
5. 土層説明での土色は、小山正忠・竹原秀雄 2008『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社を使用した。
6. 遺物は、遺構単位に掲載し、掃図・図版とともに同一の番号を付した。なお、図版については、掃図番号も付している。
7. 遺物実測図は、一点破線が施釉範囲を示している。
8. 遺物観察表の数値は、（ ）が復元値、< >が残存値を表し、計測不能なものは空欄とした。
9. 引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。

本文目次

例言・凡例

本文目次

挿図目次・図版目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過

1 遺跡の位置と環境	1
2 調査に至る経緯と調査体制	4
3 調査の方法と経過	6

第Ⅱ章 遺構と遺物

1 1 区	7
2 2 区	11
3 遺構外・擾乱出土遺物	16

第Ⅲ章 まとめ

17

引用・参考文献	17
遺物観察表	18
報告書抄録	奥付け

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置.....	1
第 2 図 遺跡周辺の地形	2
第 3 図 周辺の遺跡（中世）	3
第 4 図 試掘調査のトレーンチ位置.....	5
第 5 図 調査区の位置およびグリッド設定図	6-7
第 6 図 遺構位置図.....	6-7
第 7 図 1区 遺構位置図	7
第 8 図 1～4号溝実測図（1）	8
第 9 図 1～4号溝実測図（2）および出土遺物	9
第 10 図 1・2号土坑および1～3号小ビット実測図	10
第 11 図 2区 遺構位置図.....	11
第 12 図 5～7号溝実測図および出土遺物	12
第 13 図 8～12号溝実測図.....	13
第 14 図 13・14号溝および1～3号流路実測図.....	14
第 15 図 3・4号土坑および4～19号小ビット実測図.....	15
第 16 図 遺構外・擾乱出土遺物.....	16

図 版 目 次

図版1 1～4・7号溝、2区
図版2 1～7号溝、1・2号土坑
図版3 8～14号溝、1～3号流路、出土遺物

第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過

1 遺跡の位置と環境

太斎金塚遺跡のある新発田市は、新潟県の北部、阿賀野川右岸のいわゆる阿賀北地域のほぼ中央に位置する。江戸時代は新発田藩の城下町として、明治時代から戦前にかけては陸軍歩兵連隊の軍都、戦後は阿賀北地域の経済の中心地の一つとして発展した地方都市である。平成15年に北蒲原郡豊浦町と、同17年に同郡紫雲寺町・加治川村と合併したことにより、北西は日本海に面し、東は山形県に接する広大な市域となった。現在の総面積は532.82km²、人口は約10万3千人である。

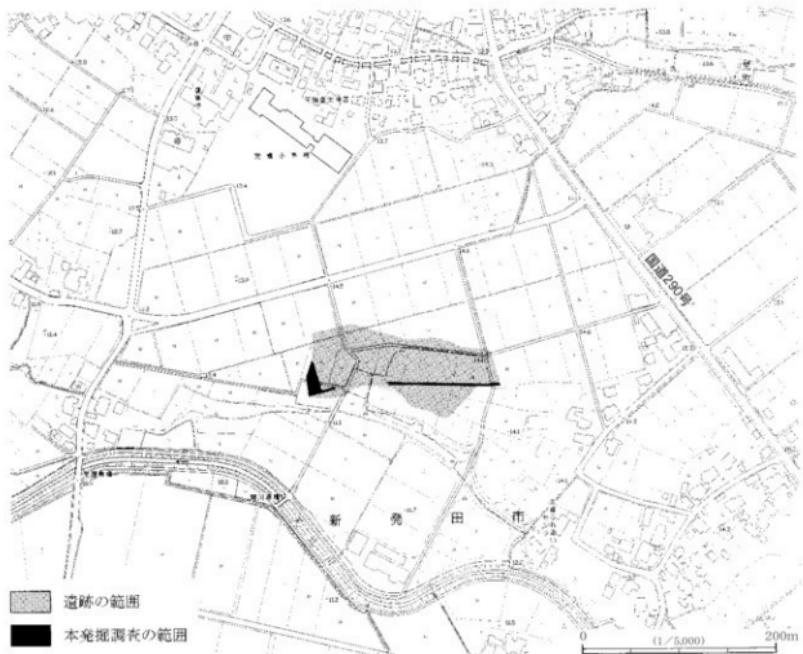
市域の地勢は、平野部とその東縁部の五十公野丘陵、南方の五頭連峰、北方の櫛形山脈からなり立っている。平野部は新潟（越後）平野の一部で、加治川・姫田川・坂井川などによって形成された扇状地や自然堤防、および海岸線に平行な砂丘列の海岸平野や潟湖の干拓地などによって構成されている（国土地理院1993）。

太斎金塚遺跡は、市街地の南、加治川がかつて五十公野丘陵の南側を流れていた時期に形成された扇状地に位置している。北側には佐々木川、南側には天辻川がそれぞれ西流し、約200m離れた東側には国道290号線が通る。標高は約13～14mで、現在、遺跡とその周囲は水田と畑地になっている（第2図）。

扇状地には、大小さまざまな河川によって段丘や自然堤防などの微高地が数多く形成されている。これらの微高地には、古代から中世にかけて遺跡が数多く営まれてきた。今回の調査でも、検出した遺構・遺物は主に中世に該当すると考えられる。以下、本遺跡に関連する周辺の中世遺跡について、これまで発掘調査が実施された遺跡を中心に概観する（第3図）。



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡周辺の地形

集落跡は、断続的ではあるが、いずれも古代から中世にかけて営まれている。佐々木川分流の北江に沿って延びる微高地に位置する荒神裏A遺跡（2）では、主な中世の遺構として掘立柱建物跡や井戸、木棺墓を検出している。木棺墓からは漆器椀と六道鏡が出土しており、当時の副葬品のセット関係を考える上で良好な資料となっている。新発田川と佐々木川に挟まれた自然堤防に位置する山王遺跡（16）では、中世の遺構として竪穴建物跡4棟のほか、掘立柱建物跡や井戸、土坑墓などを検出している。また、羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物も出土しており、集落内で小鍛冶が行われていた可能性が窺える。天辻川と芋御江川の間の微高地には正尺遺跡（28）、妻ノ神遺跡（29）が位置している。正尺遺跡では、竪穴建物跡や掘立柱建物跡のほか、方形に巡る周溝を持つ建物跡を検出している。妻ノ神遺跡では、方形に巡ると推定される二重の区画溝を検出している。

城館跡については、太斎館跡（17）で堀と郭の一部を検出している。調査の結果、堀を含めると一辺が約80mの単郭式方形居館で、出土遺物から15世紀前半には廃絶されたと考えられる。

それ以外に、蚕取橋遺跡（4）では古墳時代後期から中世にわたり断続的に流れていた川跡を、大真木遺跡（14）では方形区画墓1基を検出している。また、中世に比定できる遺構は検出していないが、荒神裏B遺跡（3）、松橋遺跡（9）からは中世の陶磁器や土師質土器が出土している。

その他に、遺跡の周辺には、石仏・石塔・板碑といった中世の石造物も点在している。近いところでは、本遺跡の約150m南にある太斎集落には五輪塔の水輪（「太斎公民館石塔群」）が、約200m北の荒町神明宮の境内には石仏や五輪塔の空風輪、板碑（「上荒町神明社石造物群」）が現在も残っている。



- | | | | | | |
|-----------------|------------|----------|----------|----------|-----------|
| 1 太斎金塚遺跡 | 2 荒神裏A遺跡 | 3 荒神裏B遺跡 | 4 蛇取橋遺跡 | 5 北養口の塚 | 6 上沢田遺跡 |
| 7 八幡神社経塚 | 8 清水谷遺跡 | 9 松橋遺跡 | 10 塚田首塚 | 11 家裏北遺跡 | 12 家裏南遺跡 |
| 13 古道下遺跡 | 14 大真木遺跡 | 15 南光遺跡 | 16 山王遺跡 | 17 太斎館跡 | 18 五十公野館跡 |
| 19 五十公野城跡 | 20 上杉景勝陣所跡 | 21 池之端館跡 | 22 橋場遺跡 | 23 乙次館跡 | 24 志村屋敷館跡 |
| 25 天王原首塚 | 26 天王前遺跡 | 27 赤橋館跡 | 28 正尺遺跡 | 29 妻ノ神遺跡 | 30 小坂館跡 |
| 31 小坂遺跡 | 32 八幡新田館跡 | 33 八幡館跡 | 34 館屋敷経塚 | 35 八幡城跡 | 36 石歳遺跡 |
| 37 興野遺跡 | 38 浦館跡 | 39 浦遺跡 | 40 助橋下遺跡 | 41 浦の腰塚 | 42 浦城跡 |
| ● 石造物（石仏・石塔・板碑） | | | | | |

第3図 周辺の遺跡（中世）

2 調査に至る経緯と調査体制

平成13年度に県営狙い手育成基盤整備事業として、太斎地区（計画面積90.4ha）が採択された。これを受け、新発田市教育委員会（以下、市教委）では、は場整備予定地のうち、これまで分布調査を行っていないかった国道290号線の西側について、平成19年11月に調査を実施した。その結果、太斎集落の北西、天辻川の右岸に沿って延びる微高地上に広がる水田および畑地において、古代の土師器・須恵器と中世の陶磁器の破片を探取した。この結果を踏まえて、同20年1月に新潟県新発田地域振興局（以下、県振興局）農村整備部と豊浦郷土地改良区（以下、豊浦土改）、市教委は協議を行い、遺跡の有無を確認するために平成21年の秋に試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は平成21年11月19日～30日の期間で実施した。幅1.5m、長さ3.0mの試掘坑（トレンチ）を、分布調査で遺物の散布が認められた範囲を中心に、広域農道を挟んで南側に50箇所、北側に4箇所の合計54箇所に設定して調査を行った（第4図）。調査の結果、1・10～12・41・43号トレンチでは溝、7・27・30号トレンチでは土坑、31号トレンチでは小ピット群を検出した。遺物包含層は確認されず、出土遺物も少量であったが、遺構から中世の陶器が出土していることなどから、当該期の遺跡と判断した。ただし、現在の地表面から遺構確認面の地山までは深さが20～30cm程と浅く、表土直下で地山を検出したトレンチも多くあったことから、旧地形は後世にかなり削平されていると推定された。

この調査結果を受けて、平成21年12月に県振興局と豊浦土改、市教委は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、面工事範囲のうち遺跡に該当する部分については、盛土施工することでその保存を図ることとなった。しかし、農道予定地については、その下にバイオラインを埋設するため幅広の掘削は避けられないこと、また計画の変更も難しいことから、遺跡に該当する部分の保存は困難であるという見通しとなった。そこで引き続き調整を行い、遺跡に該当する農道予定地および面工事範囲の一部について、平成22年6月から本発掘調査を実施することで合意した。

以上の協議を踏まえて、市教委では、新発田市教育委員会教育長（以下、市教育長）が平成22年4月15日付け生学第109号「新遺跡の発見について（通知）」を新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）宛てに提出し、県教育長は同年4月30日付け教文第137号「遺跡の周知について（通知）」で、今回の試掘調査で発見した遺跡を「太斎金塚遺跡」として新たな埋蔵文化財包蔵地に登録したことを通知した。事業主体者である県振興局は、文化財保護法第94条第1項に則り、同年4月20日付け芝振農整第87号で、県教育長宛て「埋蔵文化財発掘の通知について」の文書を市教育長に提出し、これを受けて市教育長は、同年5月7日付け生学第258号「埋蔵文化財発掘の通知について（進達）」を県教育長へ進達した。県教育長は、同年5月13日付け教文第202号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で、市教委および県振興局に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知を出した。県振興局は市教委へ発掘調査の実施を依頼し、これを受けて、県振興局長と新発田市長との間で、発掘調査の実施委託について契約が締結された。その後、市教育長は同年6月2日付け生学第476号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を県教育長へ提出し、文化財保護法第99条第1項の規定により発掘調査に着手することを報告した。市教委は、6月7日から現地に入り発掘調査を開始し8月12日まで実施した。

調査費用の分担は、例言にも記載したが、総額の90%（ただし、平成23年度の整理・報告書刊行の費用については92.5%）を県振興局が、直接農家の負担分である総額の10%（同7.5%）については文化財保護部局が負担した。後者については、その半額を国庫補助、残りを県と市のそれぞれが負担した。なお、調査体制は次のとおりである。

調査体制

平成21年度（試掘調査）

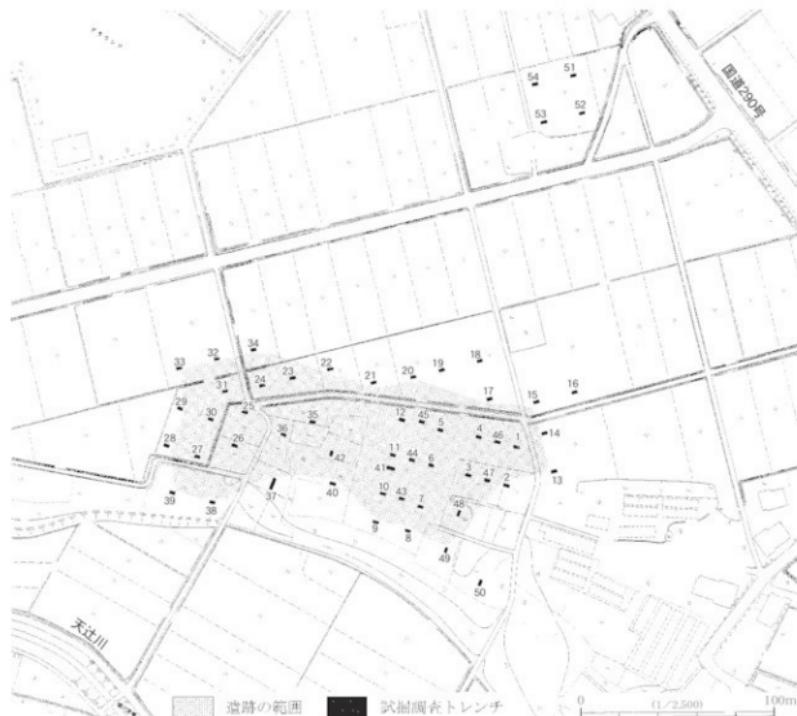
調査主体	新発田市教育委員会（教育長 大滝 異）	調査担当	津田 憲司（生涯学習課 文化財技師）
監理	土田 雅穂（教育部長）	調査員	鶴巻 康志（生涯学習課埋蔵文化財係長）
総括	杉本 茂樹（生涯学習課長）	事務局	渡邊美穂子（生涯学習課 主任）
田中 耕作（生涯学習課 参事）			

平成22年度（本発掘調査）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長 大滝 異～11月30日、塙野 純一 12月24日～）	調査担当	津田 憲司（生涯学習課 文化財技師）
監理	土田 雅穂（教育部長）	調査員	本田 祐二（生涯学習課 文化財技師）
総括	杉本 茂樹（生涯学習課長）	事務局	渡邊美穂子（生涯学習課 文化財技師）
田中 耕作（生涯学習課 参事）			

平成23年度（整理作業・報告書作成）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長 塙野 純一）	調査担当	津田 憲司（生涯学習課文化行政室 文化財技師）
監理	新保 勇三（教育部長）	調査員	本田 祐二（生涯学習課文化行政室 文化財技師）
総括	荻野 正彦（生涯学習課長）	事務局	渡邊美穂子（生涯学習課文化行政室 主任）
田中 耕作（生涯学習課文化行政室長）			



第4図 試掘調査のトレンチ位置

3 調査の方法と経過

調査の方法と調査区の設定（第5図）

発掘調査対象範囲のうち、試掘調査により後世の擾乱の影響が著しいことが明らかとなった部分については、調査対象外となった。そのため、調査地点は2地点に分かれている。西側を「1区」、東側を「2区」と呼称し、調査は1区、次いで2区の順番に実施することとした。調査終了後は直ちには場整備工事に着手する予定となつたため、調査区は埋め戻しを行わずに引き渡すことで県振興局および豊浦土改と合意した。

グリッドについては、バイブルайнの埋設工事にともなう測量机を基点に設定した。一辺10m四方の方眼を大グリッドとし、西から東へ「A」・「B」…、北から南へ「a」・「b」…として、「Aa」・「Bb」…のようにそれらを組み合わせて呼称した。大グリッドはさらに東西と南北にそれぞれ5分割、合計25分割して2m方眼の小グリッドとした。これらの小グリッドは、西から東および北から南へそれぞれ「1」・「2」…とし、大グリッドの名称と組み合わせて北西から「Aa1-1」・「Bb5-5」というように呼称した。

基本層序

擾乱などの影響が及んでいない地点を選び、1区・2区でそれぞれ2箇所ずつ、合計4箇所（①～④）で深掘りを行い、①・②地点では西壁で、③・④地点では北壁で土層を観察した。

土層は表土を含めて大きくI～VI層に分けられ、III～VI層については、色調や含有物などからさらに細分した。I層は耕土。II層は黒褐色砂質土で、2区で部分的に確認できた。III層は灰オリーブ色シルト、IV層は灰黄色を基調とした砂である。1区から2区のPc・dグリッドにかけてはIII層以下が、それよりも東においてはIV層以下がいわゆる地山に相当する。遺物包含層は確認されず、遺構はIII層およびIV層の地山上面で検出した。

現地調査の経過（日誌抄）

6月7～7月2日 7日からユニットハウスやトイレの設置、駐車スペースの設営など、調査の環境整備を行う。10日に発掘器材を搬入し、1区の調査を開始する。バックホウでの表土掘削を行った後、人力による掘削・精査を行い、遺構プランを確認した。遺構の遺存状態は良くなかったが、B・Ccグリッド以北において溝、土坑、小ピットを検出した。なお、同グリッドよりも南では、後世の削平が著しく遺構は検出できなかった。グリッドの設定を行った後、各遺構の調査に入り、図面の作成や写真撮影を行う。2日に1区の完掘写真を撮影。その後、レベリングなどの図面の補足を行った。

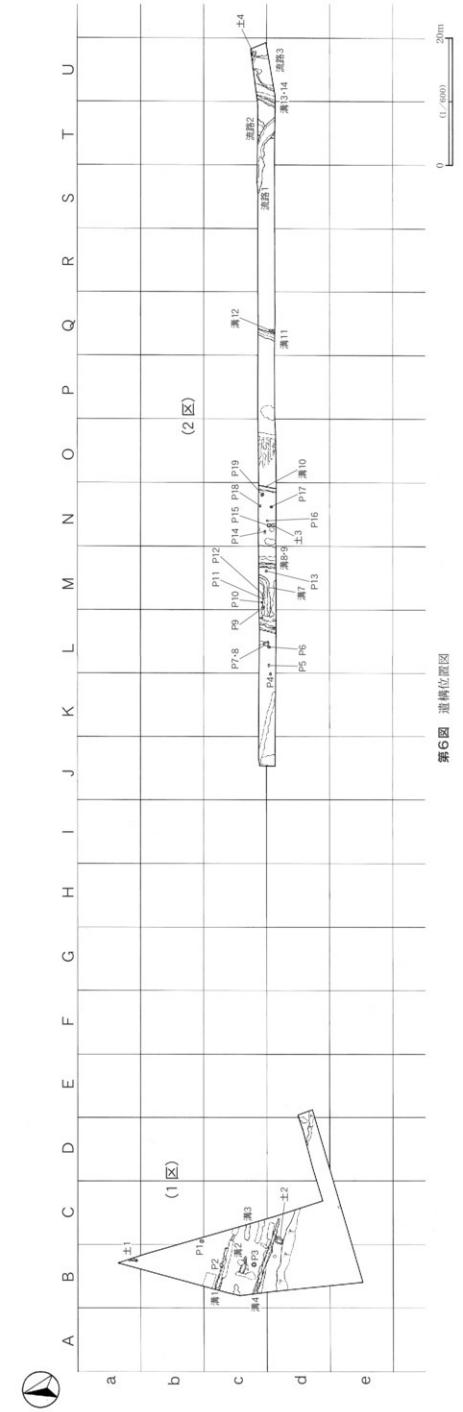
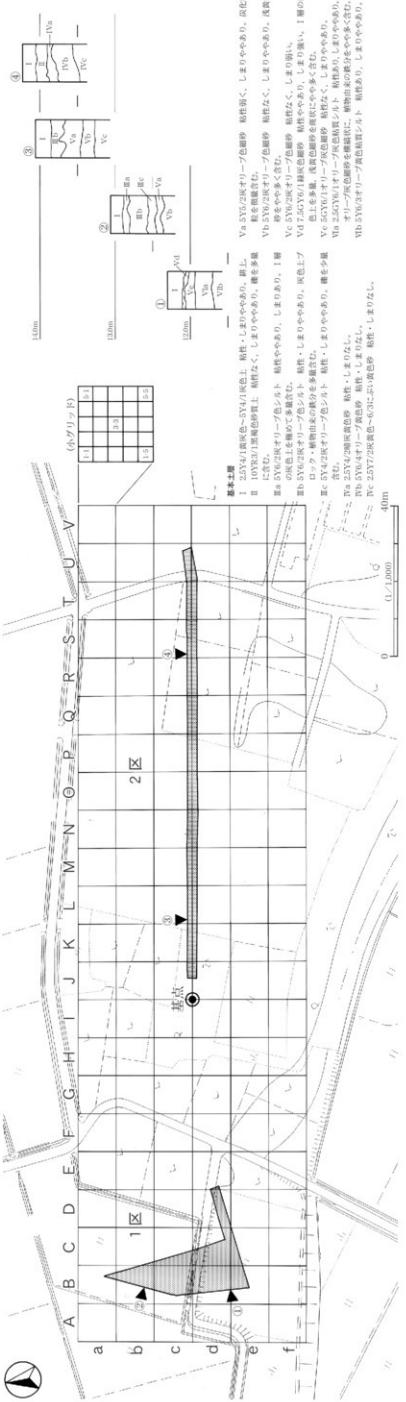
7月5～9日 2日午後から開始したバックホウによる2区の表土掘削が5日に終了。1区と並行して、調査

を開始する。7日に1区の調査が完了。以降、本格的に2区の調査に入る。9日に人力による掘削・遺構確認が終了し、グリッドを設定する。

7月20～8月12日 雨天により1週間現場が中断した後、各遺構の調査に入る。検出した遺構は溝、流路、土坑、小ピットで、1区と比べてその遺存状態は良好であった。しかし、遺構の分布は、Lc～Mdグリッドでは比較的密であったが、それ以外は疎らであった。8月9日に2区の完掘写真を撮影。引き続き、レベリングなど図面の補足や地形測量、基本土層図の作成などを行う。11日に図面作業がすべて終了し、発掘器材を搬出する。12日にユニットハウス・トイレの設備を搬出しつて、現場での調査をすべて終了した。

整理作業

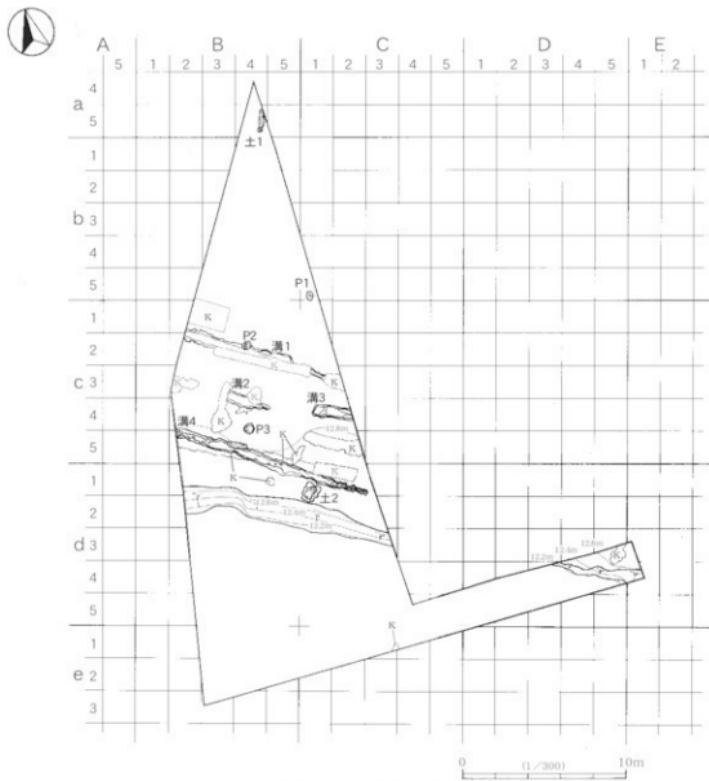
発掘作業終了後の9月から作業を開始した。平成22年度は、現場で作成・撮影した遺構実測図や写真的整理、および出土遺物の水洗・注記といった基礎的な整理作業を行った後、遺物については、接合・復元作業を行った。平成23年度は本格的な整理作業に着手し、報告書掲載遺物の選び出しと実測、遺構・遺物図面のトレース、遺物写真的撮影を行った。併せて、図版版下の作成、原稿執筆を行い、報告書を印刷・刊行した。



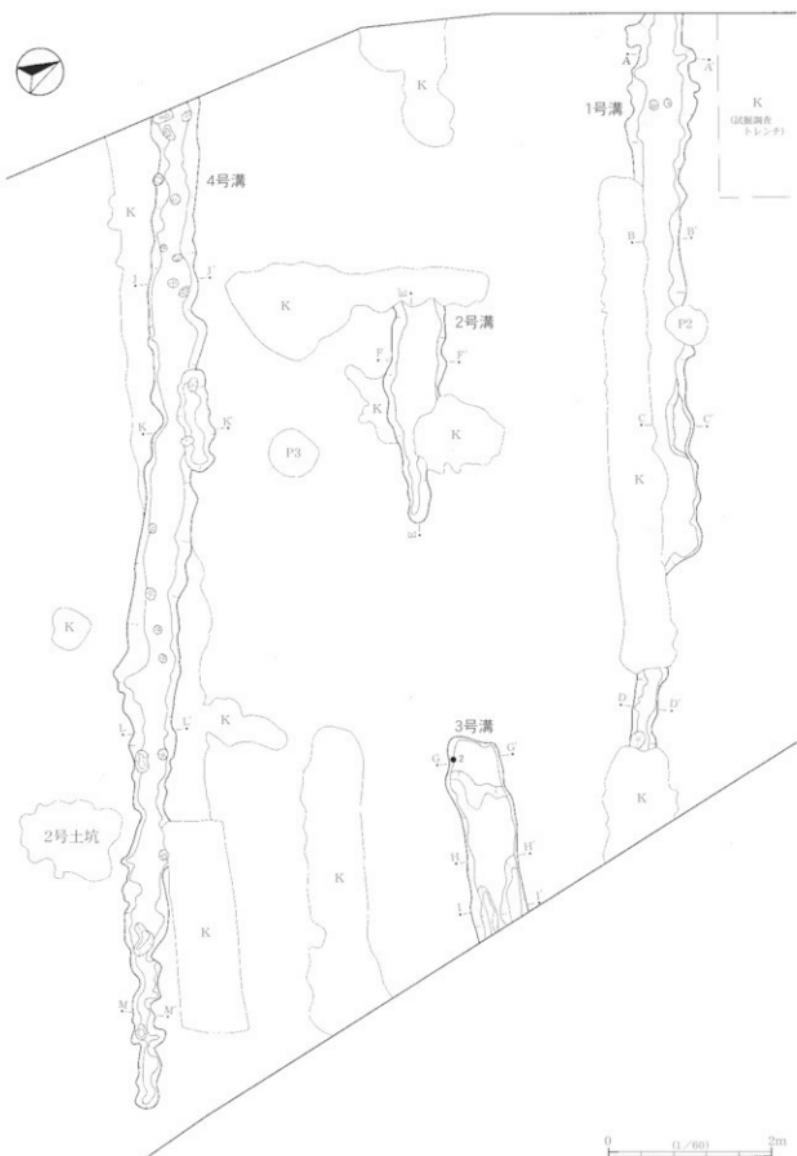
第Ⅱ章 遺構と遺物

1 1区

本調査区は、Ba4-4～Ed1-4グリッドに位置する（第7図）。調査区の面積は351.1m²で、遺構は、耕土である1層のすぐ下、地表面から深さ20cm程のⅢa層の地山上面で確認した。検出した遺構は、溝4条、土坑2基、小ピット3基で、そのうち、溝については道路遺構の側溝と考えられるものも確認できた。ただし、後世の掘削の影響により、いずれも上部は著しく削平されており、遺存状態は良くない。なお、一段低くなっているBd2-1～Ed1-4グリッドから南側については、地山も大幅に削られていたため遺構は確認できなかった。出土した遺物は少量で、中世陶器が主体である。



第7図 1区 遺構位置図

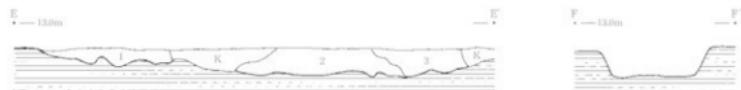


第8図 1～4号溝実測図（1）



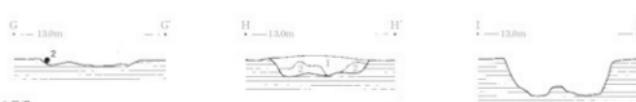
1号溝

- 1 2.5Y4/1黄灰色土 粘性弱く、しまりあり。浅黄色～灰白色シルト粒をやや多く含む。
- 2 2.5Y4/1黄灰色土と5Y7/2灰白色シルトの混合層 粘性・しまりややあり。ローム粒をやや多く含む。



2号溝

- 1 2.5Y3/1黒褐色土 粘性ややあり、しまりあり。明黃褐色～灰白色シルトブロックをやや多く含む。
- 2 2.5Y3/2黒褐色土 粘性・しまりややあり。灰白色シルト粒を極めて多量。ローム粒を多量。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 3 10YR3/1黒褐色土 粘性・しまりややあり。灰白色シルトブロック・ローム粒を少量含む。



3号溝

- 1 2.5Y4/1黄灰色土 粘性弱く、しまりあり。にげい黄色シルト粒をやや多く含む。
- 2 2.5Y4/1黄灰色土 粘性・しまりややあり。にげい黄色シルトブロックを極めて多量含む。



4号溝

- 1 2.5Y3/2黒褐色土 粘性・しまりややあり。浅黄色シルト粒およびブロックをやや多く、ローム粒を少量含む。
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色土 粘性・しまりややあり。灰白色シルト粒およびブロックを極めて多量。炭化物粒を微量含む。



0 (1/30) 10cm

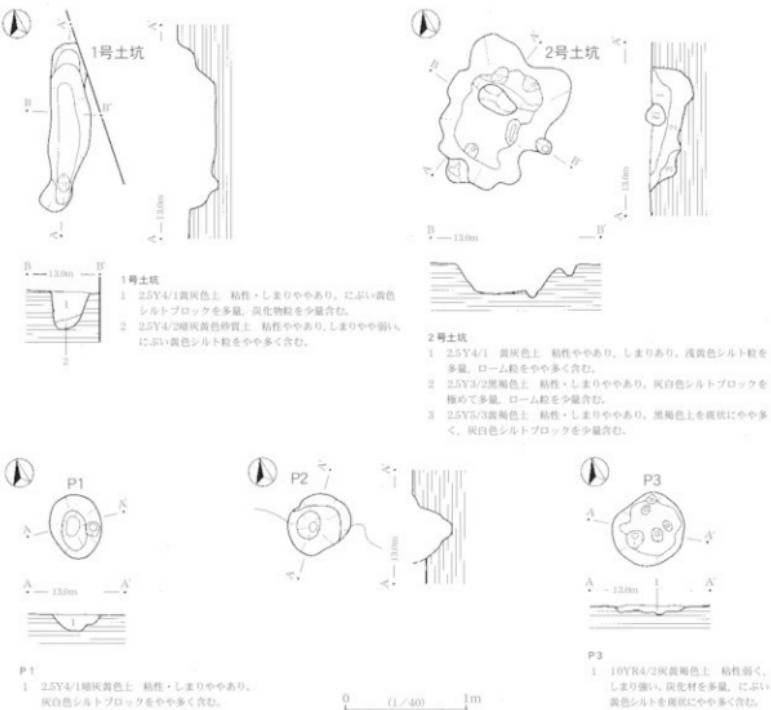
第9図 1～4号溝実測図（2）および出土遺物

1～4号溝（第8・9図）

1号溝は、Bc2-1～Cc1-3グリッドに位置する。幅は50～80cm、確認面から底面までの深さは10～15cm²、北西方向に直線状に延びる。ただし、Cc1-3グリッドでは幅が30cmと狭まり、深さも3cm弱と非常に浅くなる。断面は逆台形で、底面は凹凸がある。埋土は2層に分けられ、かわらけの小片（1）が1層から出土している。なお、古代の須恵器の小片も出土しているが、混入と考えられる。本遺構の時期は、出土遺物から14～15世紀と推定される。

2号溝は、Bc3-3～5-4グリッドに位置する。擾乱により西側の先端部が壊されているが、その長さは約3mと推定される。最大幅は70cm、確認面から底面までの深さは15cmで、断面は逆台形、底面は凹凸があり、埋土は3層に分けられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

3号溝は、Cc1-4・2-4グリッドに位置する。幅は70cmで、東側は調査区外に延びる。断面は逆台形、底面は一部深く掘り込まれており不整形である。埋土は2層に分けられ、1層から珠洲の甕の小片（2）が出土している。本遺構の時期は、出土遺物から14～15世紀と推定される。



第10図 1・2号土坑および1～3号小ピット実測図

4号溝は、Bc2-4～Cd3-1グリッドに位置する。幅は50～80cm、確認面からの深さは15cm程で、北西方向に直線状に延びる。断面は逆台形で、底面は比較的平坦である。ただし、Cd2-1・3-1グリッドでは、幅が30cmと狭く、深さも3cm弱と非常に浅くなり、底面の凹凸が著しくなる。出土遺物はなく、時期は不明である。

1号溝と4号溝については、規模が類似しており、かつほぼ平行して直線状に延びていることから、道路遺構の側溝と推定される。側溝を除いた道路の路面幅は5.3～5.6mとなる。ただし、路面部分については、後世の攪乱や削平により、硬化面や石敷・盛土などは確認できていない。また、2・3号溝との新旧関係も不明である。

1・2号土坑および1～3号小ピット (P1～3) (第10図)

1号土坑は、Ba4-5グリッドに位置する。平面は長楕円形で、長軸が1.4m、短軸が33cm、確認面から底面までの深さは30cmである。断面はU字形で、埋土は2層に分けられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

2号土坑は、Cd1-1・2グリッドに位置する。平面は不整な隅丸長方形で、長軸が1.2m、短軸が90cm、確認面から底面までの深さは20～34cmで、底面は凹凸が著しい。なお、遺構の上面で長軸33cmの大形の礫を検出したが、意図的に置かれたものなのか否かは判然としない。出土遺物はなく、時期は不明である。

P1～3は、いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。なお、P2は1号溝と一部重複しているが、その新旧関係は不明である。

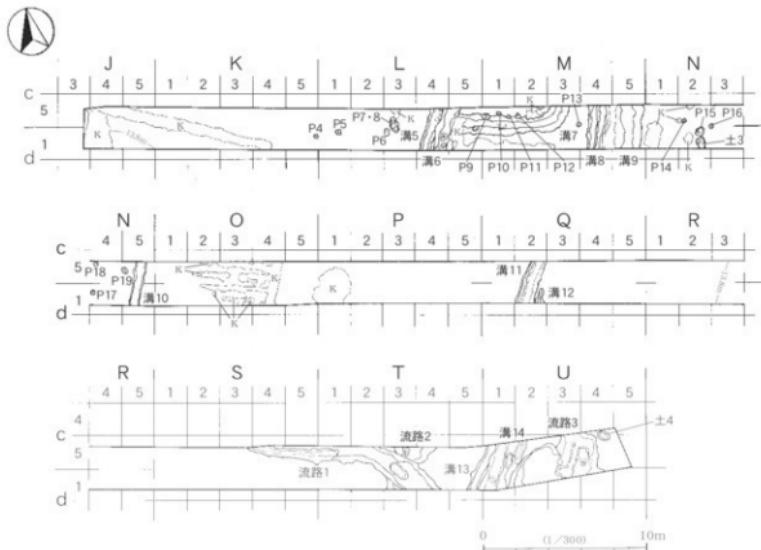
2 2 区

本調査区は、Jc3-5～Ud5-1グリッドに位置する（第11図）。調査区の幅は2.6m、長さ115m弱と狭長で、面積は300m²である。遺構は、現地表面から深さ20～30cm程の地山上面で確認した。地山は、既に触れたようにJ～Pc・dグリッドまではⅢ層のシルト、それより東ではⅣ層の砂となる。検出した遺構は、溝10条、土坑2基、小ピット16基のほかに流路3本で、遺存状態は比較的良好であった。なお、調査区の西部、Jc3-5～Kd4-1グリッドで検出した2条の溝は、出土遺物などから近世の所産と考えられたので、擾乱として扱っている。

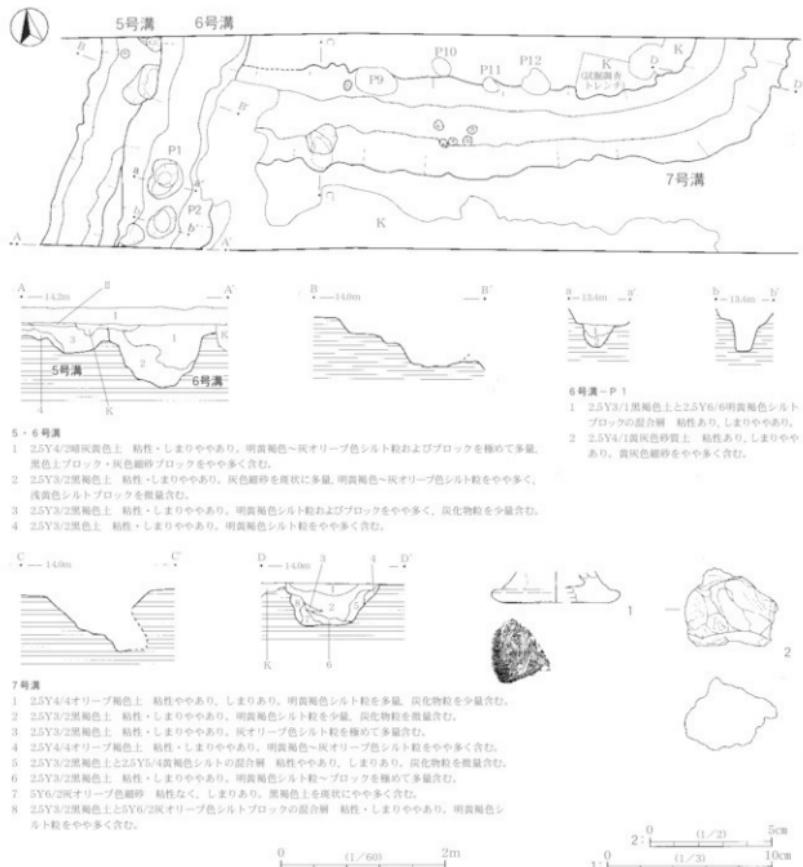
5～14号溝（第12～14図）

5・6号溝は、Lc4-5～Ld5-1グリッドに位置する。両者とも北東方向に直線状に延び、部分的に重複している。西側に位置する5号溝は、幅が70cmで、確認面からの深さが20cmである。断面は逆台形、底面は平坦で、埋土は2層に分けられる。東側の6号溝は、5号溝を一部壊して掘り込んでおり、また擾乱によって一部壊されている。幅は1.1m、確認面から底面までは60cmと深く、断面はU字形である。底面は比較的平坦で、南側に小ピットが3基掘り込まれている。埋土は2層に分けられる。どちらも出土遺物はなく、時期は不明である。

7号溝は、Lc5-5～Md3-1グリッドに位置する。東西方向に5.5mほど直線状に延びた後、東側のMc3-5・Md3-1グリッドで北に向かって屈曲する。幅は1.1～1.3m、確認面から底面までの深さは50cmである。断面は逆台形、底面は平坦で小ピットが1基掘り込まれている。埋土は黒褐色土を主体とし、8層に分けられる。擾乱によって一部壊されているほか、西側で6号溝と直交し、またP9～12とも一部重複しているが、その新旧関係はいづれも不明である。遺物は、試掘調査で古漁戸の花瓶（1）が2層から出土したほか、鍛冶関連遺物（2）が出土している。本遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半と推定される。



第11図 2区 遺構位置図



第12図 5～7号溝実測図および出土遺物

8・9号溝は、Mc4-5～Md5-1グリッドに位置し、部分的に重複して南北方向に延びる。西側の8号溝は、幅が44～68cm、確認面からの深さが54cm、断面は逆台形で底面は平坦である。東側の9号溝は、8号溝の東側肩部を壊して掘り込んでいる。幅は2.7mで、確認面から底面までは88cmと深い。東側は二段に掘り込まれており、斜面途中に52～96cmの幅広な平坦面がある。どちらも出土遺物はなく、時期は不明である。

10号溝は、Nc5-5～Nd5-1グリッドに位置し、北東方向に直線状に延びる。幅は80～60cm、確認面からの深さは20cmで、断面はU字形である。埋土は単層で出土遺物はない。そのため時期は不明である。

11号溝は、Qc2-5～Qd2-1グリッドに位置する。北東方向に直線状に延び、幅は0.9～1.1m、確認面からの深さは34cmである。西側は二段に掘り込まれており、斜面途中に幅20cm程の平坦面がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

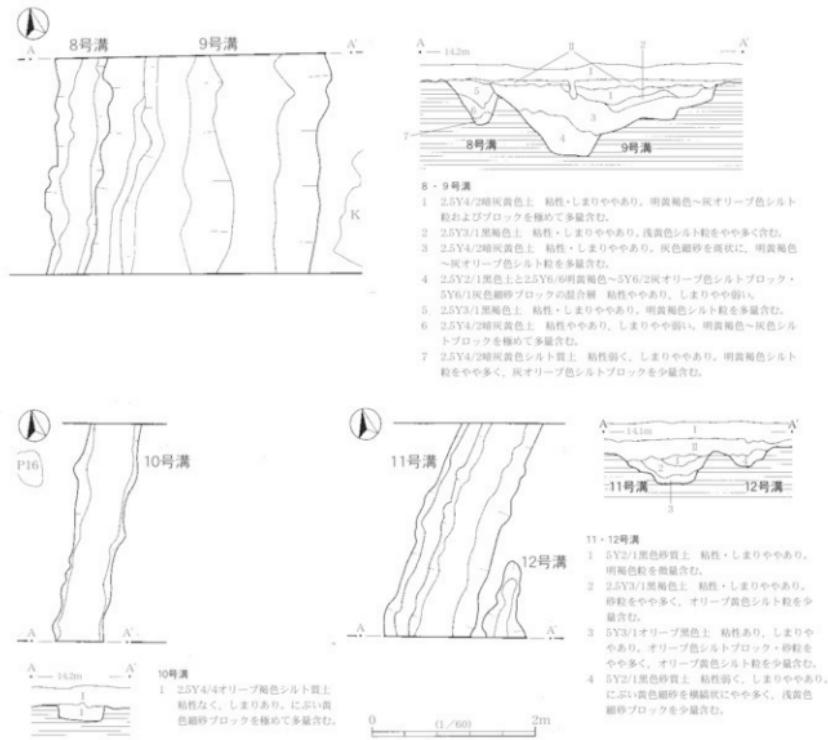
12号溝は、11号溝のすぐ東に隣接する。検出したのは先端部付近だけで、大部分が調査区外に延びると推定される。最大幅は50cm、深さは20cmで、断面は不整な逆台形である。出土遺物はなく、時期は不明である。

13・14号溝は、Td5-1~Ue2-5グリッドに位置する。直線状に北東方向に延び、部分的に重複する。10~14層が埋土に該当するが、その様相からは新旧関係は判然としない。ただし、最終的には同時に埋まると考えられる。西側の13号溝は、幅が60~80cm、確認面から底面までの深さが30cmである。断面は逆台形で、底面は平坦である。東側の14号溝は、幅が1.5~1.7m、確認面から底面までは60cmと深い。東側は二段に掘り込まれており、斜面途中に幅26~60cmの平坦面がある。どちらも出土遺物はなく、時期は不明である。

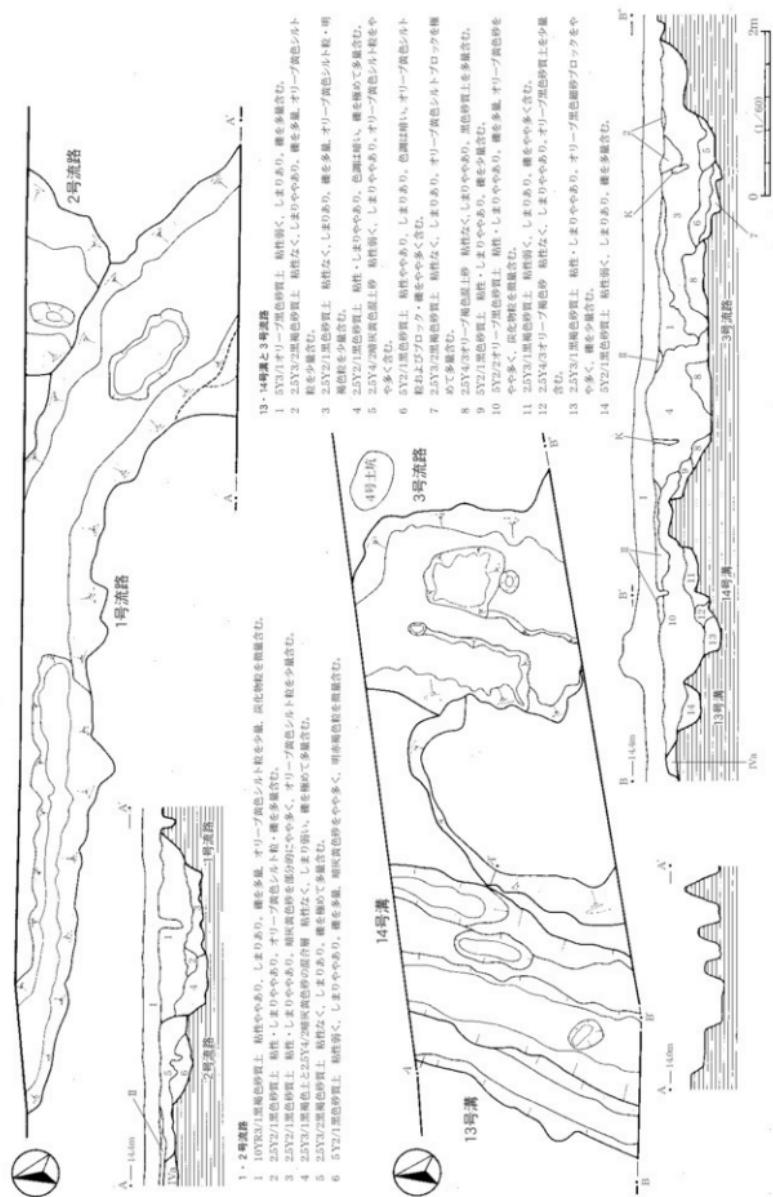
1~3号流路（第14図）

1・2号流路は、Sc3-5~Td4-1グリッドに位置する。1号流路は幅1.1~1.5m、深さ60~50cm、2号流路は幅1.7m、深さ40cmである。両者とも溝の可能性もあるが、ここでは形態から流路と判断した。埋土の観察から、1号流路が2号流路よりも新しいと考えられる。どちらも出土遺物はなく、時期は不明である。

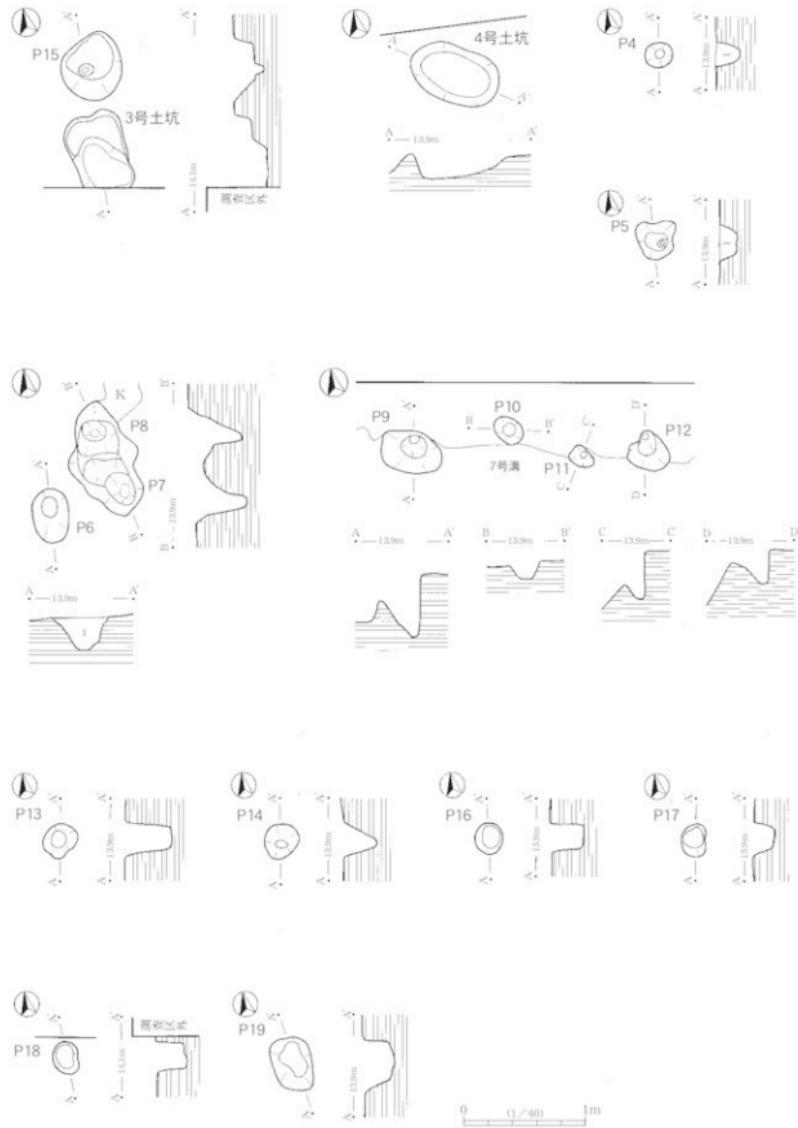
3号流路は、調査区の東端、Ud1-1~4-1グリッドに位置する。平面は不整形で最大幅4.5m、深さ54~80cmである。埋土の観察から14号溝より新しいと推定されるが、出土遺物はなく、時期は不明である。



第13図 8~12号溝実測図



第14図 13・14号溝および1～3号流路実測図



第15図 3・4号土坑および4~19号小ピット実測図

3・4号土坑および4~19号小ピット(P 4~19) (第15図)

3号土坑は、Nd2-1グリッドに位置する。平面は隅丸長方形だが、一部が調査区外に広がるため正確な規模は不明である。確認できた規模は、長軸が60cm、短軸が45cm。確認面から底面までの深さは26cmで二段に掘り込まれている。出土遺物はなく、時期は不明である。

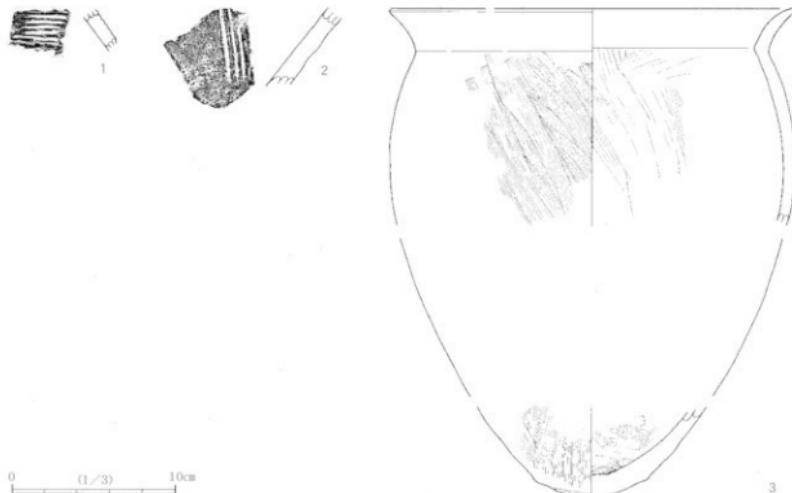
4号土坑は、調査区の東端、Uc4-4・4-5グリッドに位置する。平面は楕円形で、長軸75cm、短軸45cm。確認面から底面までの深さは19cmである。出土遺物はなく、時期は不明である。

P 4~19は、Kd5-1~Nc5-5グリッドにかけて位置している。検出した範囲ではその配列は不規則で、建物の柱穴などは想定できない。なお、P 9~12は7号溝と重複しているが、既に述べたように、その新旧関係は不明である。いずれの小ピットも出土遺物はなく、時期は不明である。

3 遺構外・攪乱出土遺物

遺構外からの遺物の出土は、遺構内からの出土遺物と同様に少ない。いずれもI層の耕土からの出土で、その内容は、中世陶器と近世の陶磁器が主である。そのほかには、1区のBe2・3-1グリッドの調査区壁付近から、古墳時代後期の土師器甕の破片(3)がまとめて出土している。Vd層からの出土で、すべて同一個体である。当初は遺物包含層の存在も考慮したが、他の場所からは遺物が全く出土しなかったことやVd層の層相などから、踏み込みなどの後世の作用によって下の層に沈み込んだものと判断した。

ここでは、中世の遺物として、珠洲の壺と瓦質土器の片口鉢の小片を各1点、古墳時代の土師器甕1点の計3点を図化した。



第16図 遺構外・攪乱出土遺物

第III章　まとめ

今回の発掘調査では、2つの調査区から、溝14条、流路3本、土坑4基、小ピット19基を検出した。しかし、出土遺物が限られたために時期を比定できた遺構は少なく、調査範囲の制約もあって、その成果は限定的なものとなった。ここでは、主な検出遺構である溝について若干の検討を加えて、まとめとしたい。

1区では、道路遺構の側溝と推定される1・4号溝を検出した。後世の削平により遺存状況は良くないが、確認できた溝の間隔すなわち路面幅は5.3～5.6mで、溝の出土遺物から14～15世紀前半に該当すると考えられる。2区では、検出した溝のうち、6・7・9・11・14号溝が幅1m以上と広く、区画溝として機能していたと推定される。また6・9号溝については、もともとあった5・8号溝をそれぞれ埋めた後に改めて幅広に深く掘削していることから、規模の拡長を意図して作り替えた可能性が考えられる。なお、14号溝については、13号溝との新旧関係が判然としないため、作り替えたか否か不明である。これらの溝からは出土遺物がなく、時期が不明である。唯一、7号溝からは遺物が出土しており、その時期は15世紀後半と考えられる。

以上の結果から、本遺跡は14～15世紀の中世後期に営まれた集落跡と考えられる。ただし、建物跡や井戸などは検出されなかったことから、集落の主体は今回の調査範囲外に広がっていたものと想定される。

本遺跡の周辺には、同じ中世の集落遺跡として、約800m東に山王遺跡が、天辻川を挟んで約1km南には正尺遺跡や妻ノ神遺跡が位置している。また、400m程東には居館跡の太斎館跡が立地している。今後は、これらの遺跡との関連をどのように捉えて位置づけていくかが課題の一つとして挙げられる。周辺地域の資料の増加を待って再度検討する必要があるといえる。

引用・参考文献

- 小野正敏編 2001『図解・日本の中世遺跡』
- 川上貞雄 2000『小坂地区遺跡発掘調査報告書 正尺遺跡・小坂館遺跡・妻ノ神遺跡』 豊浦町教育委員会
- 国土地理院 1993『1:25,000 土地条件図 新発田』
- 新発田市史編纂委員会編 1980『新発田市史』上巻 新発田市
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989『珠洲の名陶』
- 田中耕作・伊藤喜代子 ほか 1998『大真木遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 津田憲司 2011『太斎館跡 発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 鶴巻康志 1998『市道関係遺跡発掘調査報告書1 山王遺跡第1・2次調査 松橋遺跡 岡塚館跡』 新発田市教育委員会
- 鶴巻康志・水井いすみ ほか 2005『荒神裏A遺跡 発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 鶴巻康志・吉田好孝 ほか 2008『蚤取橋遺跡・神明裏遺跡 発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 豊浦町史編さん委員会編 1987『豊浦町史』 豊浦町
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 北陸中世考古学研究会編 2008『北陸中世のみち』
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 渡邊美穂子・永井いすみ ほか 2006『荒神裏B遺跡 発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

遺物観察表

※ 遺物の編年については、古瀬戸は藤澤2008、珠洲は珠洲焼資料館1989、吉岡1994を参照。

出土地点	番号	種別	計測値 (cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法の特徴	グリッド	備考
1号溝 (第9区)	1	土師質土器 かわらけ	口径: (5.6) 底径: (4.1) 高さ: 1.4	にぶい褐色。焼成やや軟。胎 土は緻密。	底部は回転ヘラ切り。 上は緻密。	Be5-3 1層出土	I/4遺存 15C+
3号溝 (第9区)	2	珠洲 焼		灰褐色。焼成良好。白色紋を少 量含む。	外表面は平行タキ。	Cel-4 1層出土	IV～V期 14～15C前半
7号溝 (第12区)	1	古瀬戸 花瓶	底径: (7.8) 高さ: (1.9)	素地は灰白色。輪はオリーブ 灰色。焼成良好。胎土は緻 密。	底部外表面を除く内外面に灰輪。 底部は回転糸切り。	41トレ (式輪) 2層出土	底部I/4遺存 後IV期(古) 15C後半
	2	鉄塊系遺物	長径: 3.8 短径: 3.2 厚さ: 3.0	重量: 52.6 g		Mc	
遺構外 ・擾乱 (第16区)	1	珠洲 焼		灰色。焼成良好。白色紋を少 量含む。	外表面は平行タキ。	Bb 1層出土	IV～V期 14C～15C前半
	2	瓦質土器 搖籃		灰白色。焼成良好。石英・長 石は多く含む。	横目は浅く、一単位は4条以 上。	Cel-3 擾乱出土	15C
	3	土師器 集	口径: (24.6) 底径: 2.4 高さ: (13.3)	明赤褐色。焼成良好。砂雜・ 白色紋・石英・長石・雲母を 多く含む。	外表面は胴部を斜ハケメ後、口縁 部を横ナデ。内面は粗く斜ハケ メ。底部は横ハケメ。	Be3-1 IVd層出土	口縁～胴上部1/8、 底部1/2遺存 口縁～胴部外面に 保付着



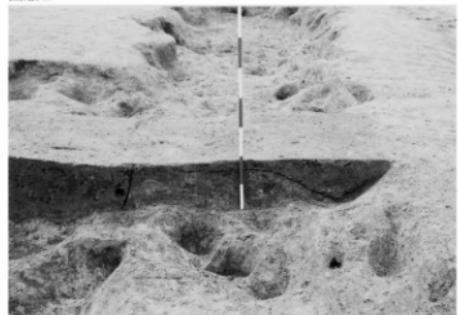
1～4号溝の完掘状況
(北西から)



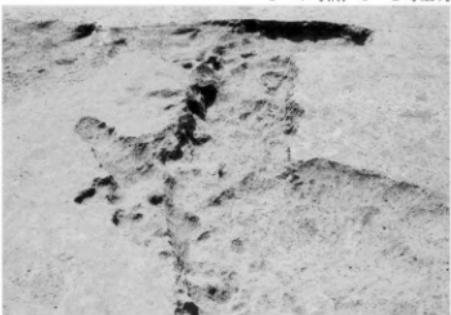
2区の全景（西から）



7号溝の完掘状況
(西から)



1号溝の土層断面（東から）



2号溝の完掘状況（東から）



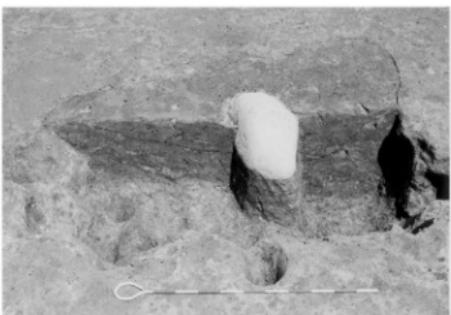
3号溝の土層断面（東から）



4号溝の土層断面（東から）



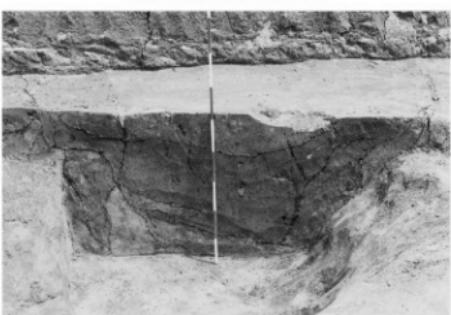
1号土坑の完掘状況（南から）



2号土坑の土層断面（南東から）



5・6号溝の土層断面（北から）



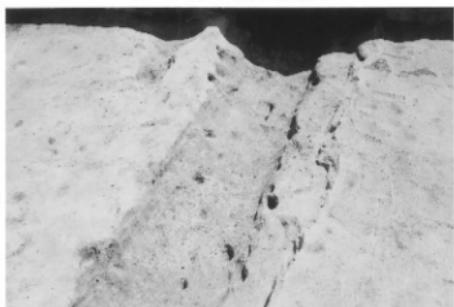
7号溝の土層断面（南西から）



8・9号溝の土層断面（南から）



10号溝の完掘状況（北から）



11・12号溝の完掘状況（北から）



13・14号溝の完掘状況（北から）



1・2号流路の完掘状況（東から）



3号流路の完掘状況（北西から）

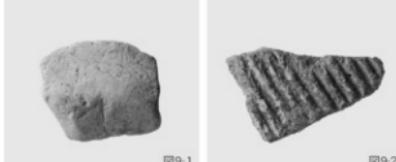


図9-1



図9-2

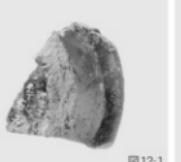


図12-1

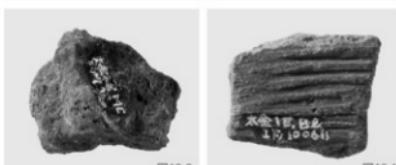


図12-2

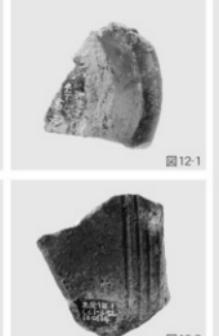


図16-1

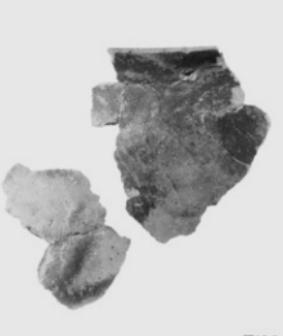


図16-2

図16-3

報告書抄録

ふりがな	ださいかばづかわいせき							
書名	太斎金塚遺跡 発掘調査報告書							
副書名	県営ほ場整備事業(太斎地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ							
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第45							
編著者名	津田憲司							
編集機関	新発田市教育委員会（教育部 生涯学習課文化行政室 埋蔵文化財係）							
所在地	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 TEL 0254-22-9534							
発行年月日	平成24（2012）年3月9日							
体裁	A4判 横組1段 本文18頁 写真図版5頁							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
太斎金塚遺跡	新発田市太斎 字金塚401番地 ほか	15206	693	37° 92' 50"	139° 32' 98"	20100607～ 0812	651.1m ²	県営ほ場 整備事業 (太斎地区)
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	中世 (室町時代)	溝14条 土坑4基 流路3本		中世陶器、瓦質土器、 土師質土器、 土師器(古墳時代)				
要約								
中世の集落遺跡で、14～15世紀に營まれたと推定される。今回の調査では、溝や土坑、流路などを検出した。中でも溝は、幅1m以上のものが多く検出され、それらは区画溝として機能していたと推定される。また、道路遺構の側溝と考えられるものも検出した。ただし、建物跡などはみつからず、集落の主体部は今回の調査範囲外に広がると想定される。								

太斎金塚遺跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（太斎地区）に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

発行 平成24（2012）年3月9日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次281番地2

印刷 株式会社 複島印刷